

のサポートを期待する声がありました(45頁)。さらにビハーラ活動者養成研修会修了者においても「実践現場で困ること、不安に感じること」の質問で「対話における難しさ」の回答がありスーパービジョンの環境整備への対策が求められています(61頁)。これらのことから、その対策として専門的相談の場(スーパービジョン)の環境整備の必要性が考えられます。これは教区では限界があり、宗派としていかに整備するかが課題でしょう。何より活動者の支えと活動意欲に繋がるものは「やりがい・充実感」(65頁、86頁)でしょう。活動を通して利用者からの笑顔や感謝の言葉といった反応をもらった時であるといった声が寄せられています

3. 病院・施設等との連携について — 施設職員との信頼関係の構築 —

この課題については、今回はじめて具体的に見えてきたものです。教区ビハーラにおいては「施設職員との連携」(25頁)としてどのような関係を築いていくかが課題として挙げられています。ビハーラ活動全国集会でも「スタッフとのコミュニケーションが取れない」(36頁)等の活動先での人間関係の難しさや、「施設側からの制約」(39頁)や「施設からビハーラが理解されていない」(39頁)等の声がありました。またビハーラ活動者養成研修会修了者においても「どこまで踏み込めるのか」(61頁)といった施設職員との関係構築に対する戸惑いや自信のなさについての声がありました。これらについて、活動者が施設職員との連携が出来ていない状況であれば、活動者の活動意欲も維持することが難しいと考えられます。施設側がどのようなニーズを持っているのか、また、ビハーラ活動者として何が出来るのかを整理し位置づけることができるのかが、各活動グループの課題だと考えられます(61頁)。その対応策として、地道に草の根レベルで施設職員との関係をつくる必要でしょう(40頁)。ビハーラ活動者は施設職員と利用者との関係に介入することになりますから、利用者との良好な関係とともに、施設職員との信頼関係を築くことが課題であると考えられます。そのことが結果的に、施設職員と利用者との良好な関係づくりになるからです。

4. 今後の展開としてのビハーラ活動の専門性と一般性(当初の理念の確認)

ビハーラ活動が発足以来30年を経た今、その活動は多様化してきています。当初は仏教を基礎としたターミナルケアを中心に取り組んでいた活動が、高齢者施設だけでなく、地域支援をはじめとして子どもたちへの活動や災害支援活動等、いよいよ広がりを見せています(24頁)。寺院活動と施設等公共空間との区別を図りながらも相互作用がはじまっていると考えられます。活動30年を経た今、発足当初の願いである誰もが出来る活動としての再確認をしようという声も今回みられました(26頁)。こうした状況にあって、専門性と一般性の方向がバラバラというのではなく、両者の関係性、つまり共通点と相違点を明確にしていくことも今後の課題であると考えられます。